

位置をたしかめておくことが必要であろう。

地域研究は、何でも屋のゼネラリストだけでは進歩しない。研究の専門的分化が必要である。しかし専門的分化が進めば進むほど、広い視野に立った総合化の必要も強まる。地域研究にとっては、学際的な研究協力がとくに必要なことはいうまでもないが、そのためにもラテンアメリカ研究全般の到達地点の見取図が必要であろう。ラテンアメリカ研究という大きな場を共通してもつが、種々の専門領域にわかれ、さらに、ことなつた時代やことなつた国を研究対象とする研究者が、たがいに情報を交流し、刺激しあい、協力してゆく場をつくりだすこと——そのための一つのステップとしてこのシンポジウムが役立つことを期待したい。

文化人類学 大貫良夫

ラテンアメリカの文化人類学的研究が本格的に日本で進められるようになるのは、戦後のことである。そもそも文化人類学という名称自体、日本では戦後に普及したのであり、大学における専門課程ができたのも同様である。文化人類学は、ヨーロッパにおいて民族学あるいは人類学、アメリカにおいては人類学として発展してきた学問分野で、専門の学としての成立は19世紀も末近い頃である。その目的や観点は、方法論とともに紆余曲折を経てきたが、基本的には、人間の文化をさまざまな要素の機能的連関の体系とみなし、またその体系は不動の構造をもつものではなく、時間とともに変化するものとみて、そのような文化の全体的構造と変化のプロセスを解明することを目的としているといえるだろう。しかし、そうはいっても、文化人類学が対象とした文化は、全体の展望なり把握なりの可能なもしくはそのような全体把握のための学問的操作の容易なものがほとんどである。それは、非文明社会や非都市社会、あるいは都市とか国家社会の中の小さな部分社会である。そしてもうひとつ、特にアメリカでの伝統であるが、先史学の分野である。アメリカ大陸では文字による歴史記録は皆無に近く、原住民の文化伝統を問題にすると、16世紀よりも

前の歴史は考古学的方法による以外知りようがない。民族学は必然的に先史学と隣り合わせ、重複しあうのである。特にラテンアメリカでは、マヤ、アステカ、インカの文明を担った人びとが、今日のメキシコ、グアテマラ、ペルー、ボリビアに多数居住し、国家社会の一翼を担っており、その人びとの文化的伝統すなわち生活様式、社会的慣習、観念等の理解は、その国の文化や社会を論じるときにも不可欠である。そしてその人びとの歴史は先史時代に直結する。またその他の地方、特にベネズエラ、コロンビア、ブラジルなどでも、文明社会こそ築かなかつたが、多数の先住民が住んでおり、その文化伝統は現代社会に貢献した要素をいくつも生みだしてきた。文化人類学は、こうして、新大陸の元来の住民たちの文化の多様性と長い歴史を明らかにすることを直接の目的としている。ラテンアメリカはアメリカ合衆国の人類学者が昔から格好のフィールドとしてきたところであるが、わが国でも最近急速に研究者や関心をもつ者が増えてきている。以下、いくつかの分野に分けて、日本におけるラテンアメリカの文化人類学研究の動向を概観する。

1) 中央アンデスの先史学

中央アンデスの先史学研究は1958年の東京大学アンデス地帯学術調査団の手で開始された。この調査団は、創設間もなかつた東京大学の文化人類学教室が中心になったことで、その後のラテンアメリカの文化人類学研究の日本における発展の端緒となった。

同調査団は、新旧両大陸の文明起源に関する比較研究という大きな研究計画の一環として始まった。1958年の一般調査ののち、集中的な遺跡発掘に取り組むことになったが、そのような究極の目的に向かって、調査対象の時代は、紀元前1000年前後のいわゆる形成期に求めた。1958年の第1回一般調査ののち、1960年、63年、66年、69年と合計5回の調査で、コトシュほかペルー中央部のワヌコ盆地の諸遺跡、トゥンベス近郊、中央海岸のラス・アルダス、北高地のラ・パンパなどの発掘を行なった。これらの発掘は、アンデスの先史学に新しい知識をもたらすと共に、大きな刺激を与えた。そのみならず、日本人の研究者を少なからず育成する役割を果たしている。諸遺跡の発掘結果をまとめた報告書5巻のほかに、研究書や啓蒙書、学術論文も数多く出版されている。それらは石田英一郎、泉靖一、曾野寿彦、寺田和夫、増田義郎、狩野千秋、松沢

亜生、藤井龍彦、大貫良夫、加藤泰建等によって書かれた。

1968年の石田・曾野の死、そして1970年の泉靖一の死によって、現地調査は一度途絶えたが、日本での研究は継続できるだけになっていた。そして1975年に日本核アメリカ調査団が寺田和夫を中心に組織され、ラ・パンパの発掘、1979年のカハマルカのワコロマ発掘と、再び発掘調査を行なうようになり、新しい研究者が育ちつつある。1958年の第一回調査以来、ペルーの研究者はもとより、多くのラテンアメリカの研究者との交流も順調に運んできている。これら日本人によるアンデスの先史学調査は、他国のものに比べると規模が大きく、データが豊富かつ正確であり、報告が詳細である点で、非常に高い評価を受けている。

2) 中央アンデスの民族学

先史学の調査が契機で、東大の文化人類学教室からアンデスの民族学へ関心を寄せる者も出てきた。佐藤信行は1958年から60年までペルーのクスコ地方の社会人類学的調査を行ない、友枝啓泰は64年から67年までアヤクチュ地方の民族学的調査を行なった。その後両名はアンデス高地やアマゾン低地での調査と研究を行ない、民族学的研究を続けてきた。また、山本紀夫は植物学の専門を生かしてアンデス高地民の植物利用の詳細な実地調査を進めはじめ、民族学的知見は次第に大きくなる傾向が出てきた。

1978年、増田義郎を中心に、南部ペルーの民族学的調査が行なわれた。それまで個人的に進められてきた研究を基礎に、国立民族学博物館の共同研究会が組織されてきたが、そこへの参加者を中心に、いろいろな角度から南部ペルーの民族学を検討しようという目的で、1978年の調査が始まった。これには増田、佐藤、友枝、山本、藤井、大貫が参加し、成果は『国立民族学博物館研究報告』第5巻1号(1980)にまとめて発表され、1981年3月には、スペイン語版も刊行された。また1980年末には、日・米・秘の研究者が集まって、大阪と京都で1週間にわたるシンポジウムが開かれた。

こうして民族学的研究は先史学より少し遅れて出発したものの、新しい文化人類学の研究動向の発展と共に、活気ある研究分野となろうとしている。若手研究者も続出する傾向にあり、かなり長期にわたる精力的なフィールドワークが実施されている。社会人類学、シンボリズム、生態学、高地の牧畜民などの

分野で大きな成果があがりつつある。

3) 南アメリカ低地

アマゾニアはじめオリノコ流域など南アメリカ低地は文化人類学のフィールドとして広大なところであるが、日本人研究者の本格的な研究はまだない。1950年代末の大給近達のブラジルでの調査、70年代の友枝によるペルー・アマゾンの調査等がある程度である。しかし、最近の新しい研究方向による調査研究に対する関心は小さいとはいえない。文献面での研究は行なわれている。またライヘル＝ドルマトフ、レヴィ＝ストロース、メッガーズ、カスパールの著書の邦訳も行なわれた。アメリカやイギリス人の人類学者やライヘル＝ドルマトフなどが、新しい角度から低地の原住民文化を研究して、興味深い研究を發表しており、低地の研究は今後わが国でも積極的に取り組むべきであろう。

4) メソアメリカ先史学

日本人による発掘調査はない。大井邦明がメキシコに住んで、メキシコ人の発掘調査に大きな役割を果たしているだけである。しかしながら、文献研究では多少熱意をもつ研究者がいる。そして啓蒙書はかなり多く、邦訳も多い。しかしながら、第一線の研究は行なわれていない。本格的な研究者が出なければいけない分野である。

5) メソアメリカ民族学

これもほとんど行なわれていない。黒田悦子がオアハカのミヘ族の調査を行ない、いくつかの論文を發表している。主として東京大学の文化人類学教室の大学院学生による研究は最近積極的になり、メキシコやグアテマラでフィールド・ワークと研究が行なわれたので、これからの進展が期待される。

6) エスノヒストリー

アンデスとメソアメリカのエスノヒストリーの研究の発展は目ざましい。日本ではかなり以前から増田義郎がエスノヒストリーにたずさわってきて、研究書やクロニカの邦訳を著わしてきた。『大航海時代叢書』の刊行はそのような研究方向が基礎になって企画・実現の運びとなっている。最近では小林致宏がメキシコのエスノヒストリー研究を活潑に進めており、ほかにも少数ながら積極的な関心を寄せる若手研究者が現われはじめた。

5) その他

グアテマラの染織、ペルー先史文化の染織、パナマ・コスタリカの先史土器や染織に関する研究が、大学その他の研究機関に属さない研究者によって行われているが、文化人類学のなかの物質文化研究というよりも、美術的あるいは技術的研究という性格である。

ほかに啓蒙活動の部類に入るが、東大の文化人類学者の積極的協力をもとにした展覧会が数多く実施され、アンデス、エクアドル、コロンビア、メソアメリカ、アマゾニアの先史文化や民族文化が日本で紹介されてきた経緯もある。

文 学 木 村 榮 一

この10年ほどの間に翻訳、紹介された現代ラテンアメリカ文学の作品は驚くほどの数にのぼるが、周知のようにその嚆矢となったのが1968年に邦訳の出したホルヘ・ルイス・ボルヘスの『伝奇集』と『不死の人』である。また同年に、ミゲル・アンヘル・アストゥリアスの『緑の法王』の翻訳も出ている。アストゥリアスはともかく、ボルヘスがこの二作品の紹介を機に一般の読者にもその名を知られるようになり、以来彼の作品が次々に翻訳されて、現在では文学的市民権とでも呼びうるような資格を獲得していることは周知のとおりである。

70年に入るとM・A・アストゥリアスの『大統領閣下』やガブリエル・ガルシア・マルケスの『百年の孤独』が翻訳出版され、その一方で短編選集が編まれたり、あちこちの文芸雑誌でラテンアメリカの現代文学や個々の作家を対象にした特集が組まれたりして、ボルヘス以外の作家の紹介、翻訳が始まり、ようやく一般の読者の間にラテンアメリカ文学に対する関心が高まり始めた。これは先にものべたように1970年代のことだが、ラテンアメリカ諸国では60年代に入ると主として小説の分野で、爆発的な勢いで話題作、問題作が発表され、これが世界の注目を集めて〈ラテンアメリカ文学ブーム〉と呼ばれるようになったことはよく知られている。その波が70年代に入ってようやく日本にも